

5月号から、価格市況調査委員の各担当者に担当品目を紹介して頂きます。第1回目は、北海林産株式会社・清水啓雄社長による広葉樹材です。

## 広葉樹材についてのお話

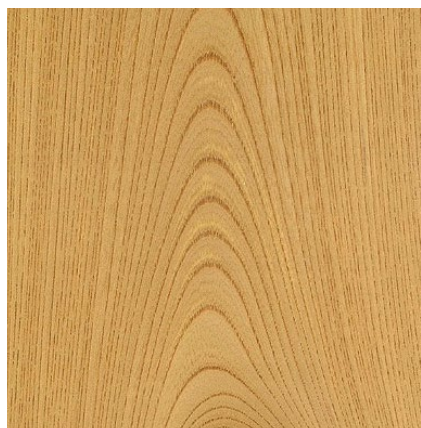
広葉樹材 前担当：

北海林産株式会社

清水 啓雄

### ① 広葉樹業界の変遷

明治維新前ではケヤキ以外は広葉樹材を建築に使う風習はまれだった様に聞いております。どちらかと言うと、道具用材、薪炭材が中心で呼称も永い間、「雑木(ゾウキ)」が一般的でした。この為か、木場の業者も「ケヤキ屋」、「キリ材屋」はいわゆる「雑木屋」と別の業態で分かれておりました。雑木屋が、いわゆる広葉樹を専業に扱いはじめた要因は、主に港区芝の洋家具の発祥、並んで横浜元町と神戸元町の洋家具生産に伴って興った様です。現在も盛業の新木場の(株)林材木店、齋藤木材(株)はそれぞれ芝、横浜が発祥と伺っております。広葉樹の流通が拡大した大きな要因に、北海道の国有林、道有林の積極的な供給拡大があったと言えます。特に北海道の原生林から出材されるナラ材は品質が良く、道内各地区の広葉樹専業工場の製材技術の向上といった努力とあいまって、小樽から欧州各国に大量の製材材が出荷されました。輸出インチ材については三井物産林業(株)、(株)新宮商行、新旭川(株)各社が中心となって厳し



櫟(ケヤキ)板目のツキ板

出典：<https://wood.shop-pro.jp/?pid=31866195>

い北海道輸出検査規格(道検)を維持し、欧州でのシェアを拡大して行きました。結果として、戦後日本の外貨獲得に多大な貢献をしてきたと思います。昭和30年代後半まで輸出は続き、当時のFAS、No.1グレードは海外に、No.2、No.3材は内地送りになり、関東地区でも東京広葉樹八日会、東京広葉樹同業組合の専門業者が家具用材として流通を拡大させて参りました。昭和40年代からは家具需要の増加から、北海道、東北地方の広葉樹の利用が増え、木材産業の一角を担う材種になって参りました。50年代に入ると為替の円高が進み輸出材が止まり、その分グレードの高い材が内地向けに回り、ナラ、タモ材が建築造作材、及び建具用材として流通し始めました。一方でこれ以前から中国産ナラ、タモ材に続きロシア産(ソビエト連邦)材が廉価に入荷しておりました。この北洋材広葉樹が安定して入荷していた為、南洋材製品と競合する形で建築分野にナラ、タモが汎用品として流通するようになりました。この頃が広葉樹業界の一番隆盛した時期と思います。平成に入り、バブル経済が破綻してからは、比較的単価の高

い材種になっていた為、需要は減って参りました。東京広葉樹八日会のメンバーも最盛期には28社の加盟がありました。各社それぞれ専門分野を持ちながら、材種も、国産広葉樹ではナラ、タモ、マカバ、ザツカバ、セン、ニレ、クルミ、シナ、カツラ、ホホ、キハダ、シュリ、ブナ、クリ等、を中心に在庫しておりました。一方では南洋材についても、セラヤ以外に、ニヤトー、アガチス、ペルブック、アジア産のチーク、ローズウッド、カリン等を扱うメンバーも増えて参りました。これに加え、アフリカ産のモアビ、マコーレ、ブビンガ、アサメラ、アカジョ、ウエンジ等を扱う会員も増え、さらに米国産、カナダ産の広葉樹、ホワイトオーク、レッドオーク、アッシュ、メイプル、ウォルナット、チェリー、ポプラ、エルクを業界の範囲に含めて参りました。また製材方法も、国内で原木から製材する「内地挽き」と現地製品を販売する「現地挽き」の双方の流通があります。これらはそれぞれ、家具用材向けの板目取り、椅子テーブル用の角材、建具向けの柾目平割、建築造作用の定尺材、框用の厚盤、道具用材の小角、小割材といった多岐多岐の製品を扱う形態となっていきました。その上で、厚さサイズだけでも27mm、34mmといった標準サイズのみならず、15、18、19、21、40、45、51、66、80、90、105、130mm程度までの規格があります。この他に、長さ、巾毎に規格があり、とても1社だけでは持ちきれない規格に広がって参りました。この様な状況で少しずつ需要が減っていった為、問屋、販売店双方に厳しい時代が始まりました。現在、八日会の会員も8社になってしまいました。



ナラ

出典：木材図鑑

<http://wp1.fuchu.jp/~kagu/mokuzai/kokusan.htm>



タモ

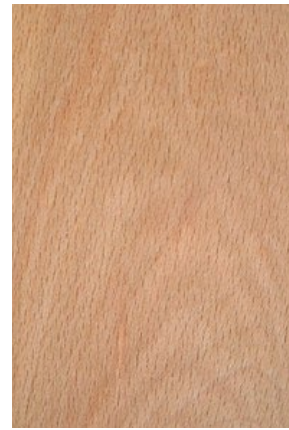
出典：木材図鑑

<http://wp1.fuchu.jp/~kagu/mokuzai/kokusan.htm>

## ② 資源の現状と見通し

原料調達の方でも厳しい状況が続いております。国産材は昭和40年後半までは北海道の銘木市では径級60cm以上の出品が半ば常識でした。樹齢150年から350年生の大径木が潤沢に出材しておりました。現状では東北地方での国有林の販売がほぼ終わり、北海道でも国有林の出材はかなり少なくなりました。3次林、4次林といった過去何回も伐採に入った山から残った立木を出材する為、径級も26から34cm程度の小径木が主体となっています。材種もミズナラ、緋カツラといった樹種が少なく、コナラ、カシワナラ、アオカツラ等しか出てきません。幾らか再生の兆しがあるとは言え、植生の統計上の数字だけで、製材用素材の供給は広葉樹についてはほぼ終わった感があります。翻って海外の広葉樹資源も同様に各国が伐採規制を強めコストのみ上がる一方で、量、品質共に厳しい状況が続いております。この様な中で頼れる資源は米国、カナダのアパラチア山脈の広葉樹に集約していきそうな感じが致します。

今後の広葉樹業界はこういった状況の中で残して伝えるべき事が幾つかあると思います。まずは広葉樹業者として守るべき事は、需要家に乾燥材を供給することだと思います。乾燥未了の材で家具、建具、造作の生産業者に迷惑をかけることは流通業者として基本だと考えます。また、それぞれの生産業者さんの製品を熟知して小径木から取った材でも適材適所に仕訳、販売することが肝要かと思います。基本的に「良い材」「悪い材」といった分類は無いと思います。我々が最終製品の要求している規格を理解していれば、自ずと勧める材料は見えると思います。長尺大径木から取った材料を潤沢に使う時代は既に終わっていると思います。昔から言われておりましたが、「広葉樹の需要は絶対無くならない」と思います。むしろ、多様な材種を良く見極めて流通に回していく「見立て」が我々の使命と考えております。



ブナ

出典：木材図鑑

<http://wpl.fuchu.jp/~kagu/mokuzai/kokusan.htm>



アパラチア山脈

<https://ja.wikipedia.org/wiki/>